
微笑みの詩

ここたそ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微笑みの詩

【Nコード】

N7833Y

【作者名】

ここたそ

【あらすじ】

スーツ店に勤務する西浦詩衣が、小学校のクラスメイト後藤篤紀と偶然再会し自然と付き合うことになる。しかし篤紀には忘れられない女性がいた。

2人の女性の間で気持ちが揺れ動く篤紀と、篤紀の全てを受け入れようと懸命になる詩衣のラブストーリー！。

空白

8時45分。一人暮らしをはじめた時に買った、お気に入りのシヨッキングピンクの目覚まし時計が今日も鳴る。

寝ぼけた目をこすり、天井を見上げる。

レースのカーテンから日差しがさしこむのを何となく眺めている。ふと我にかえる。

そうだもう彼はいないんだ…

毎朝自分に言い聞かせるのが、知らぬ内に朝の日課になっていた。空っぽになった、ベッドの左側を少し眺めた後、詩衣は珈琲を入れるためリビングへと向かった。

通勤ラッシュが少しおさまってきたころ、詩衣は埼京線に乗り新宿へと向う。

4両目にある2番目のドア付近の空席、ここが定位置だ。

平日だというのに、人であふれかえっている改札をぬけ甲州街道を10分ほど歩くと見えてくるそのビルの1階と2階が詩衣が勤務しているスーツ店だ。

少し古くなったそのビルの裏口からエレベーターに乗り2階にある従業員の休憩室へと向う。

少し遅れてやってきた、同期の大川知里おおかわちさとに声をかける。

「おはよう。昨日話してたワンピース可愛いの見つかった？」

「全然だめ。このままだと友達の結婚式に来て行くやつみつかない。ね！次の休日探す

の付き合って！」

2年前、地元の青森から就職のため上京してきた詩衣にとって、同期の知里はじめてできた東京での友達だった。

以来、知里とは仕事の話からプライベートなことまで何でも相談できるよき仲だ。

こんな知里と毎朝他愛もないことを挨拶代わりに話すのが詩衣の楽しみの一つだ。

おしゃべりもほどほどに、30分ほどの朝礼を終えると店内は開店準備に追われ各々が持ち場につく。

詩衣が清掃している焦げ茶色のフローリング

の階段を少し小走りに店長が下りてゆき、自動ドアのスイッチを入れる。

開店前から待っていた客がちらほらと店内に吸い込まれていく。

その客を笑顔で迎えることから、詩衣の毎朝の業務が始まる。

その日もそのように平凡な毎日がスタートした。

この時は想像もしていなかった。

その数時間後に彼に再会することを…

予感

後藤篤紀ごとうあつこのりは、飯田橋にある医療器械メーカーに勤めていた。社員は約300名ほど。その中でも営業を担当している篤紀は、日々都内の医療機関に自社商品の売り込みに通っていた。

その日は9月も下旬だというのに、やけに蒸し暑い日だった。

- のびてきた髪の毛のせいだろうか、地元の青森じゃ考えられない暑さだな -

そんなことを考えながら、篤紀は新宿にある小さな個人病院へと向かっていた。

新しく開発された心電図の導入をあつさりとは断られてしまい、踏んだり蹴ったりだなと思いながら病院を後にした時、ふと自分の革靴がだいぶ磨り減っていることに気づいた。

どこかで靴を新調し、今日はそのまま帰宅しようと思った。

…ふと篤紀はあることを思い出した。

昨日の同僚の話で、新宿にある若者向けのスーツ店に行ったがなかなか雰囲気がよく価格もお手頃でラッキーだったと喋っていたことだ。

すぐさま篤紀はその同僚に電話をし、そのスーツ店の場所を事細かに聞くと、少しだけ駆け足でその店を目指した。

再会

時刻は夕方5時を過ぎ、会社帰りであろうサラリーマン達でその店は賑わっていた。

詩衣は入り口のすぐ横にある、3段に並んだネクタイ棚の品数を確かめ商品を補充した。

- 今日の売れ行きもおそらく前年比くらいだろうか -
そんなことを思いながら手だけを動かしていた時、どこか懐かしい顔をみかけた。

彼はネクタイコーナーの斜め右にある、革靴が陳列されているスペースで、少し前かがみになりながらタッセル付きの革靴を眺めていた。

なぜだろう、その男性がとても懐かしく感じたがすぐには誰だか思いだすことが出来なかった。

「すみません！」

ふいにその男性が若干興奮気味の声で、右手をあげながら定員を呼んだ。

男性があげた右手からはほどよく筋肉のついた手首と、スーツからすこしはみ出たオフホワイトのシャツがのぞいていた。

詩衣は彼のもとにかけより、「こちらのシューズ履かれていますか……」と言いかけたその時、彼の動きが止まった。

どうしたんだろう…不思議に思い彼をしてみる。

彼は詩衣の細い首筋にかけられた社員証をその鋭い眼差しでみた後、
やっと言葉を発した。

「やっぱり！…西浦だよな？」

焦燥

その声を聞いて、私はやっと気がついた。

男のわりには2音だけ高くしたような、いや…金属音のような声だった。

「…西浦？」

私の反応がなかったので不安になったのだろう。今度は先程よりも少しだけ小さな声で篤紀は詩衣に呼びかけた。

「…久しぶりだね！」

あまりにも急で現実を受け止めるのに必死だった詩衣にとっては、その台詞を絞り出すのが精一杯だった。

それでも詩衣は、心の片隅にずっと前からおき忘れていた感情が身体の中から沸々と湧き出てくるのを感じずにはいらなかった。

―後藤篤紀は、西浦詩衣にとって初恋の相手だった―

いや、訂正しよう。10年前…当時は自分が篤紀に恋をしているとはあまりにも幼く自分自身気づいてなどいなかった。

つまり、今にして思えば詩衣が恋を意識し始めたのは篤紀が最初の相手だった。

「元気にしてたか？小学校以来だな！」

こっちの気持ちはまだついていけないのを他所に、篤紀は右手で髪

をかきあげながら話しはじめた。

やっとのことで詩衣も少し落ち着き、それから二人はお互いの近況を報告しあった。

その間中、詩衣は懐かしさと…ときめきを感じずにはいらなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7833y/>

微笑みの詩

2011年11月24日11時05分発行